

Title	おはさふ・おはさうずの意味構造
Author(s)	原田, 芳起
Citation	語文. 1955, 16, p. 46-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68491
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

おはさふ・おはさうずの意味構造

原 田 芳 起

十数年前の事になるであろうが、当時五高教授であられた上田英夫博士から、「おはさうず」という語のなりたちをどう思うかとおたずねを受けたことがある。多分熊本国語学会の席上であつたと記憶する。その答案を今書こうとしているわけである。

「おはさふ」「おはさうず」「おはしまさふ」「おはしまさうず」という語類は、宇津保物語や源氏物語にもつとも多くの用例を見出すもので、「いますかり」などとともによくやゝ特殊な感じをもたせる敬語々彙である。小林好日博士が、これらの語の存在をもつて宇津保の言語が後の時代のものであるという証とされたことがあつたが、源氏物語が劣らずこの語類を駆使していることで、小林説は従いにくいようである。今日では宇津保が源氏に先行することは、いろいろの面から諸家の論定を受けているから、改めて意見を加える必要もないが、右にいう語類の用例を見ても、源氏物語の方がやゝ年輪が加わつたという感じがあると思う。

宇津保物語がこの語類の最初の文献かと思うから、語構成、意味構造についての考えを展開する足がかりとして、この作品の用例を掲げておこう。

- 1、生まれ給へる御子をうつくしみおはさふ。(国譲中)
- 2、中門は鎖しておはしまさふ。(蔵開上)
- 3、手惑ひをしつゝ走り集りて、御輿にあたりたる東の簀子に、植多たることおはしまさふ。(蔵開上)
- 4、皆男しましまさふ中に、やもめにて。(藤原君)
- 5、「いみじう、これ聞き給へ」とて、つきしろひてつまはじきをしておはさうず。(国譲上)
- 6、賀茂川のはとりにさじきうちて、男君たちおはしまさうず。(藤原君)

二

山田孝雄博士は「おはさう」の語形を「おはさむ」の音韻変化と見なして、これを「おはす」が四段に活用する一証であると説かれた。日本文法論三三〇頁に、

これらの「う」は皆「む」の音便なり。若、所謂変格ならば、「ませう」という俗語の如く「せう」となるべきに然らず。これ一の証なり。

とある。この山田説はその後批判されて全面的承認は得ていない。四段に活用する「おはす」があつたとは認めないのが定説となり、

従つて「おはさう」ではなくて「おはさふ」であると認められているのであるが、「おはさうず」の解釈になると「おはさむとす」の音韻変化と説いた説明の方が多いように見うける。

和泉式部日記新註(玉井博士)では、「そらみみ聞きおはさうじて」について、三条西家本の「聞きおはさうとて」に従われたのであるが、「おはさむ」の音便と説かれている。同じ箇所について小室・田中両氏の和泉式部日記詳解には、

「おはさうず」は「おはさむとす」が「おはさむず」になり、更に「おはさうず」になつたのである。(木枝増一氏高等国文法講義二三〇頁)

これらの「おはさむ」「おはさむとす」音便説は、意味講造の面が全然考慮されていないことは、驚かされるばかりである。意味が変遷することは普通のことであるが、その間の過程には必然の理路があるはずである。右の場合はそれが全く不可能である。

「流る」が「流らふ」を派生し、「移る」が「移らふ」を派生する式の言語事実を、近世の国語学者が延音と説き来つたことの誤を破つて、「ふ」を継続を表わす複説尾とされたのは山田博士の劃期的な功績であつた。奈良朝文法史には「伊未佐倍^{イミサハヒ}」という例を、複語尾「ふ」の項にあげてあるのであるから、

います——いまさふ
おはす——おはさふ
おはしますおは——しまさふ

の対応関係を認められるべきであつた。にもかかわらず前のような説を立てられたのは、恐らく「おはす」の四段説を実証せんとされる

ことが急であつて、見落されたものでもあらうかと推察する。

三

山田博士が、日本文法論の中で、「おはす」の活用の所属について、詞八衢以来のサ変説を誤とし、四段と下二段が並び行われたものであることを説かれたのは、適當ではなかつたものと思われる。今日では山田説に従つてゐる人はなからうと思うが、一往私の見所て四段下二段並用説が不合理であるということを書いておこうと思ふ。

「おはす」の未然形が「おはさ」として指摘される例がきわめて少い。義門が山口葉上巻で論じているように、異本では「おはせ」とある例もあつて、この少数例は誤写と考へる可能性が成立する。同様に連用形が「おはせ」となつてゐる例が少い。このことは、活用ということが体系的なものであるという点から、未然形は大部分下二段であり、連用形は大部分四段であると認められることになつて、並用説はすじが通らないことになる。並びに行われるのであれば、ほぼ一定の比率で四段形と下二段形が現われるべきである。命令形に「おはせ」が宇津保物語・落窪物語・蜻蛉日記・枕草子等に散見することも、それが四段活の特徴であると断すべきでなく、サ変の古い形の残存であると見られることは、山口葉が正しく論じている通りである。四段下二段の両形が上述のように不均等に組合されるのがいかに不合理であるかということは、われわれが大きな恩恵をうけている平家物語巻末索引で、この語の未然形は下二段、連用形は過去の「し」の接続する「おはせ」を下二段、その他を四段とされていることで実証される。過去の「し」に接する時「せ」

になるのはサ変の一般的法則であるからである。

もし前期平安期の文献における、未然形に稀に見られる「おはさ」連用形に稀に見られる「おはせ」を誤写とすることが認められないとしても、これほどの少数形は、類推による誤用として十分説明はつくのである。

「おはす」には四段形の未然形が認めにくいのであるから、「おはさむ」という結合形は、存在しなかつたとしなければならぬ。「おはさう」[△]「おはさうず」を「おはさむ」「おはさむとす」の音便とする説は、「おはす」の活用の検討からして成立しえないことがはつきりする。

猫殿のまればれわいたるに（平家物語）

「おはす」系の「わする」にイ音便が起つているは、四段的ではないかという疑いが提起されるかと思うが、右は方言であり、かつ中世の音便現象は、個々には決して四段の連用形に限らず起つたものである。「往ぬ」の四段化は近代語の新しい時期に起つた類推的变化と思われるのに、「死んじ」「往んじ」のような音韻形は平安期からすでに現われたことからも推すことができる。室町期には、口語の「わする」は下二段化し、文語的な「おわす」は四段化したのであるが、それらを平安期からの伏流と考えることは困難である。

四

「おはさふ」が「おはす」の継続態として発生したことは、「いまさふ」が宣命に見ることからも疑う余地がない。それではこの継続態の「おはさふ」は「おはす」と意味構造がどうかうかという

ことが問題であらう。一般に註釈書などでは「おはす」に同じと解されているようである。現代語に置き換えられた場合、両者を区別することができないから、それも無理ではない。

だが、上代国語の場合、共時的に二つの形態が対立したのであるから、意味上の区分がそれに対応しなかつたと考えることは許されない。識別の困難さは、「おはす」がすでに存在を表わす語であり、それ自身が継続を含む意味をもっている点にある。「おはさう」や「おはさうず」が、中世になるとほとんど見られなくなるとは、折角発生した語形もその意味区分を識別しにくくなつたことが、その原因であるにちがいない。

前に掲げておいた宇津保物語の句例について見よう。2の「中門は鎖しておはしまさふ」は、あきらかに時間的継続を表わす。常に門をとざしていらつしやるというのである。1の例も時間的継続を表わしていると思ふのがよさそうである。

この語形は、主格が複数となる場合に限り得られるという見解があるそうである。直接その説を一読する機会を持たないでいるが、おもしろい意見であると思ふ。ただ、右の例のように時間的継続に重点があると見られる例があることを注意しなければならぬ。

前出1の例は生まれた子の祖父母にあたる正頼夫妻が主格であるから、複数主格説の例に入れてよいが、表現意図が、正頼もうつくしみ、正頼の夫人なる「宮」もうつくしむというのであれば、複数ということの有意義性が認められるが、こゝでは主格は二人一体的で、「おはしまさふ」を空間的展開とは見がたいと思う。2の例はもつとはつきり時間的展開である。3456は複数主格という点の意味を持つ。AもBもCもおはすという、空間的な展開と見ること

が正しいようである。大鏡の序段に現われる、

このおはさふ人々に、さはいにしへの世はかくこそありけれど
きかせ奉らむ

なども、こゝにあまた並み居ておはすという意味である。

細江逸記博士の動詞時制の研究に、進行形を指して *Expanded Form* となつて、英語における進行形の表現性の多様さを説いていられるのは示唆的で、日本語の中でそのような性格を持つ語形としては、この「ふ」の表わす継続態、「つつ」の表わす返復継続の態、動詞の終止形を重ねた「云ふ云ふ」「見る見る」「すす」などの形の返復継続の態などが著しい。「り」「たり」「す」などの存在態・状態とはかなりちがつた文法的性格をもつているように思われる。

雲だにも心あらなむ隠さふべしや (万葉)

なども時空的な展開を含んでいる点に、単なる隠すちがつて一時的・一回的動作でないことを示すところに、この継続態の状態性の特質がある。

「おはす」と「おはさふ」の意味構造の差を私は右のように考える。現代語にはその態的な区分が消えているために、われわれにはそれが識別しにくいにすぎないのである。平安期には、外にも「いますかり」という語形がある。これも似たような語構成と意味構造をもつものと推定される。宣命には「いますさふ」が見えるのに平安期にはそれが見あたらないのは、それに対応する「いますかり」「いますかり」があつたためであらう。

わがをばにいますかりし宮なり (宇津保、楼の上上)

一つ子にいますかりけり (同 忠こそ)

伊勢物語・大和物語・源氏物語などに用例があり、中世の文獻に

も散見する。語構成は、「いますプラスあり」であることはたしかである。ただ [k] 子音の挿入ということが問題である。これは、二つの母音をつゞけた際に、同化を起さないで、はつきり音節の谷をおいて発音されるために、わたり閉鎖音が挿入されるのだと思う。

現代鹿児島方言で、こわれることを「ウツグワルル」という、その [g] がそうである。

打ち破るる → U'waruru → u'waruru

この問題は、「なほざりに」「ありざりて」「はるさめ」などの語構成に [s] の挿入を認めるかという問題にも関連する。

ともあれ「いますかり」「いますかり」もまた時間的展開・継続のアスペクトに発音をもつた語であることはほぼ信ぜられる。

五

「おはさうず」は「おはさひ・す」の音韻変化である。この傍例となるものに「かへさうず」がある。「かへさうず」という語形は大言海にも見えないが、文明七年の跋文を有する成策堂本論語抄の訓読に何回か現われる。

卷二一 隅、而示之、不以三隅、反、則吾不復也(述而第七)
子与人、歌、而善、必使反之、而後和之(同上)

さて「かへさふ」という語は、源氏物語には終止形連用形、万葉集には已然形が見えている。(大言海) 反復する意味であるから、ただ二度するというのとは本来の意味はちがつていたわけである。

論語先進第十一の「南容三復白圭」を古くは「白圭をカヘサフ」と訓じたし、右の論語抄では「白圭ヲカエツサウス」と訓じている。反し反し説むという意味であるから、反復継続の態を表わす意味は

保たれている。語構成が「カヘサヒ・ス」であることはまちがいないと思う。

このような傍例があるのだから、

おはさひ・す↓おはさうず

であることは、多言を要せず決定できる。

なぜ「す」が加えられて派生語をなしたかということが意味構造の問題である。「かへさうず」の例でも考えられるように、「かへさふ」の状態性に、また行為性ないし動作性が累加されたごとく、「おはさふ」の状態性に行爲性動作性が累加されたと認めることができ。初めに掲げた宇津保の5の句例はその意味構造がもつとよく現われている。

つまはじきしておはさうず

は、「つまはじきして」の行為性が形式的に文末にも一度附いていると考えられないだろうか。6の例も「さじきうちておはしまさうず」が密着して、男君たちの物見むと意気込んでかくしていることが、能動的に表現されているのではないかと思う。1の「うつくしみおはさふ」も同じ意味ではないかという反問が出ると思うが、これはそれを状態として映じた所を表現したものと考えることができる。事柄のちがいでなくて、ポーズ（表現の）のちがいである。

この解釈を裏つづけるかと思われるのは、源氏物語以下の用例に見られるこの語の様式化の方向である。

宇津保物語の「おはさうず」「おはしまさうず」にはまた硬化が現われていないかと思うが、源氏物語では表現が類型化されて、一定の構造の句形が多数現われるようになっていいる。

うち笑ひおはさうず。（帚木）

遊びおはさうず。（末摘花）

いひおはさうず。（竹河）

泣きおはさうず。（真木柱）

恥ちおはさうず。（橋姫）

一例だけ、宇津保と同じ構造の

暮うちさして恥らひておはさうず。（竹河）

が現われている。「ておはさうず」は動詞との間がやゝ離れて、おはさうずが一往の独立性をもつが、連用形をうけたそれは密着一体化の度あいが強くなつていると見なされる。和泉式部物語の例の前に引いたが、これも、「そらみ聞きおはさうじて云云」というので源氏物語の用例の大部分である連用形についた形の類型に一致する。

源氏物語にもう一例、少しちがつた形が見られる。

さばかり若うさかりに清げにおはさうずる御子どもの、似給ふ

べきもあらざりけり。（宿木）

この一例だけが、他のすべての例と背いて、単に「おはさふ」というのと区別がつかない。従つて私が上にのべた意味構造に合致しないのである。すなわち、これは単に状態性を表現しているらしいのであるから、語末の「す」が何の意味を示しているのか判断しかねる。私ここで自己の判断が正しかつたかどうかを迷わなければならぬのであるが、背いているのはこの一例だけであるから、あえて自己の判断はちがつていないものとして、この例外の存在する理由を臆測することにする。

この宿木の例について、わたくしは「おはさうず」の形式化の結果、「おはさふ」との意味の区分がぼやけて来たために生じたもの

であると判定する。「笑ひおはさうず」の類も、慣用句形であつて意味作用は類型化している。それらとこれと共に、動詞としての意味の硬化形式化の現われであると考えられる。

六

「おはさふ」「おはさうず」の類の形態についての、研究史の面で、義門の山口葉は当時としては卓出した見解を残している。義門の意見を引きながら私見を展開しようとして予定していたが、論旨を単一化するためにわざと省いて来たので、最後に参考にするために彼の説を引いて、解説と必要な批判を附記しておくことにする。

竹河(源氏物語)にをさなくおはしまさうし時此花はわがぞわがぞとあらそひ給しを」とあるは、一本におはしましし時とあるによればこともなく聞ゆれど、なほ通本にてこれを解かば、こはおはしまさひし時」とあるべきを、そのひ文字の音便にうとなれるなるべし。(ついでに云上に引る大かのみ序のさうもさふの音便転用準へしるべし) 然らざれば過去のしに連くべからず。又このしは過去のしならずば、時といふ体言へ連くべからざる也云云。又おはしまさひはおはしまししの延はりたるにて、さるは宇津保国議、宮におはします時より宮たち垣の如おはしまさひ。ひて、夜は御めぐりにおはしまさふめれば」又蔵開下きみたち数をつくしておはしまさふいづれとなくあたりさへ赫くやうに云云」などなほ例少からず。ついでにいはん、これも国議、うつくしみおはさふ」とあるは、かの変格の活の料はすをのべたる也。

延音という説は当時としてはやむをえないが、従うことはできない

い。サ変に発した「おはさふ」の如き語では、連体形已然形がなぜ「さふ」「さへ」となるかということ、延音説ではたちまち説明できなくなるはずである。義門はたしかにこの壁にぶちあたつてはいるが、遂にその壁を破ることができなかった。すなわち、大鏡の「おはさふ人々」という連体形の例について、次のように記している。

其のうはふの転りと聞ゆるに、こは人々とつづければ、おはさふもなほ連く言をかねたるといひ、そのもとおはすは四段に活く言と、こゝにてまたうたがふべきに似たれど、大鏡序はそのかみはやく此の詞のつかひさまの紛ひたるか、然らずば今の本の写誤のあるにこそ

説明に窮したことがよくわかる。サ変ならば連体已然形には延音は起ることができない。延音説を捨てるか、「おはす」四段説を容認しなければならぬ。ここで彼が四段説を容認しなかつたのはさすがに事実をよく見ていたのであるが、延音説も捨てえなかつた。そこで大鏡時代に「おはす」四段が早くも紛れて発生していたかと疑つたのであると解される。

次に「おはさうず」の成立について、義門は、約音説を通用しようとしている。近世の延約通略説の一般の批判はこゝに繰返すことをしないが、義門の説も完全にその弊に落ちてしまつてゐる。

おはさうずといふ詞、ものにをり／＼見ゆ。こはおはせさうずかおはしまさするかの約まれるに、又音便う文字のそはれるなるべし。

この音韻の説明は失敗であつて、延約説が国語の史的解釈にいかん無力な理論であつたかを示している。しかしたゞひとつ、義門の

説でよいところは、語義を離れまいと努力していること。「おはす」「おはさふ」「おはさうず」を一括して、その用例をひろく尋ねて研究していることである。その点では、今日の研究でも、彼の山口葉の恩恵を蒙ることは決して少くないといふことができる。

七

附説一、「おはさふ」の活用はいうまでもなく四段である。継続態を形成する接尾語の「ふ」は、大部分は四段活用である。稀に下二段に活用する例があるが、それはどんな差異があるか、いろ／＼考えて見たがまだわからない。万葉集では「流らふ」が「流らへ」「流らふる」が現われているから下二段である。平安期では源氏物語の語彙の中で「隠らふ」が下二段である。

かくろへごと（帚木）

うちかくろへつつ多かめる（橋姫）

この「かくろふ」が万葉の語彙では四段であることは知られている通りである。そこで万葉と平安期との「かくろふ」に何か意味上の差があるかと検討してみたが、差はみられない。また「流らふ」がなぜ下二段になるかも意味上からはまったくわからない。

これは結局、接尾語化した「ふ」が四段と下二段との両方の活用系列をもつていたと考えるしか理解のみちがない。動詞「ふ」（経）は下二段である。経統態を形成した接尾語「ふ」は、意味と形からして、この「経」と同系にちがいないが、その大部分が四段であるという点に、まだ説明を要求する何物かが残っているわけである。

これは仮説以上に説明のしようもないが、完全に四段に活用する「経」が存在したと考えるよりも、不完全な活用から、一方は接尾

語となつて四段に展開し、一方は独立した動詞として下二段化したものとすべきか。それならば「流らふ」「かくろふ」の如き下二段の継続態は、第二次に発生したものであろう。

附説二、「り」「たり」の存在態には、完了の「つ」がつくのが原則であり、上に説いた「ふ」には完了の「ぬ」がつくのが原則であり、上代の句例では今の所例外を見出してはいない。「つ」「ぬ」の論は別にまとめるつもりであるが、「ふ」継続態と「たり」存在態どが、ちがつた世界をもっているらしいことが知られる。したがつて、「おはすふ」の意味の世界は「おはしたり」「おはせり」とは別のものであることも注意しなければならない。「おはしおはす」的な展開形式である。大阪方言の「いてはる」式ではない。似ているが、ムード的なちがひがあるとでもいふべきか。同じく広義の状態性を表わしながら、立体から離れた世界に、それ自体の継続ないし展開としてながめられる所に、「おはさふ」「おはさうず」の意味世界の一つの性格があるといえそうに思う。「おはしたり」「おはせり」には展開はふくまれていない。そして主体の判断として、主体の側に引きよせられる。その点で、「つ」及び「ぬ」にそれ／＼分かれて照応するのであろう。

附説三、更級日記に

ぬしたち、調度とりおはさうぜやや

という例があつた。複数主格である。各々道具をちやんとしつかり持つていらつしやいという意味らしい。